

ぼくのヒーロー

草川小学校 五年 牧野 海煌

「ただいま」とぼくが学校から帰ると、「おかえり」と、いつも大きな声で叫んで、すぐに「ほら、宿題せんね」と両親よりもうるさくて、しつこいのは、ぼくの祖母です。祖母は、近所や地域の人からは『やっちゃん』という愛称で呼ばれ、なかなかの名物おばあちゃんです。祖母も草川小学校を卒業しているのです、ぼくの大先輩です。

八十二歳の祖母は、毎日がとてもパワフルで、毎朝早起きして、暗いうちから散歩に出かけます。小学校の校門付近の落ち葉が気になれば、ぼくたちが登校する前に、はきそうじを終わらせませす。休みの日には、ぼくたちの学級花壇の手入れをします。また、見守りパトロール隊として、毎日黄色いベストを着て、大きな声であいさつをしながら、ぼくたちの登下校を見守ってくれます。「今日は、誰々の元気がなかった」とか、「誰々はいつともより登校してくるのが遅かった」と、草川小の子どもたちの様子をいつも気にかけてくれます。草川小の子どもなら、知らない子どもがいらない草川小のスーパースターです。体育の授業や昼休みに運動場に出たときに、視線を感じると、必ずフェンスの向こうから祖母が見えています。ぼくは、そんな祖母の行動をカッコいいと思うこともあれば、恥ずかしく感じる時もありました。

そんなパワフルな祖母も、新型コロナウイルスにはかからないませんでした。新型コロナウイルス感染症が広がり、祖母の行動もさすがに制限されました。一番楽しみにしていた運動会も、入場制限によって観に行けず、思い切り笑うことも少

なくなりました。ぼくへの小言も増えて、けんかになることも増えました。草川小学校に関わることで生きがいの祖母は、一気に年をとったように思います。また、祖母の元気がなくなったことで、ぼくの住む地域の活気もなくなったように感じます。

そこで、ぼくは祖母や地域の活気を取り戻す方法を自分なりに考えてみました。そのことを、これから大好きな門川町へ提案したいと思います。それは、学校の空き教室を地域に開放して、地域のコミュニティスペースとして活用することです。放課後に、ぼくたちが宿題をするために自習室として利用し、勉強の得意な大人から教えてもらったり、門川町の歴史を聞いたり、昔の遊びや歌を習ったり、占いの好きな大人からぼくの運勢を占ってもらったり、『やっちゃんの家』と名付けられたブースでは、祖母が小石で作るおじやみでお手玉を教えたり。想像すると楽しくなります。そんな地域の大人たちと交流できるぼくたちの居場所ができるといいなと思います。そうすると、祖母だけでなく、地域の高齢者も生き生きして、町全体が活気づくはずですよ。

地域の大人たちにも、ぼくたちのことをもっと知ってほしいと思います。大人たちと会話できる環境があることで、もっと門川町のことが好きになれると思います。また、学校は災害時には避難場所にもなるので、もし何かあったときに顔見知りの大人がたくさんいるだけでも安心できると思います。門川町役場のみなさん、ぼくの考えはどうでしょう。

ぼくには、将来、学校の先生になりたいという夢があります。ぼくは、子どもたちの記憶に残る小学校の先生になりたいと思っています。ぼくが草川小学校を大好きになって、そ

して、小学校の先生になりたいと思うようになったのは、祖母のえいきょうが大きいかも知れませんが。ぼくも祖母のように、誰からもたよりにされる人になりたいです。

祖母は、うるさくて、しつこいけれど、ぼくのヒーローです。
